

麦作における除草剤の剤型と効果について

金山 拓・中野正敏・野中和弘
(佐賀県農業試験場)

KANAYAMA, H., NAKANO, M. and NONAKA, K.
Influence of Formulations of Herbicide on the Herbicidal Activity
in Barley Field.

水田裏作麦で現在普及している除草剤はそれぞれの特
性から土壌条件・気象条件の違いによって薬害や除草効
果に変動がみられ、また、液剤散布布であることから散布
水量の不足が効果低下の原因になっている場合が多い。
このようなことから最近の麦作除草剤適用性試験のなか
から有望視されたベンチオカーブ・プロメトリン剤の乳
剤・微粒剤について、剤型の相違と効果について検討し
たので、その結果について報告する。

試験方法の概要

供試品種・成城2条4号、は種期・11月29日、は種方
法・全耕一施肥は種一全面浅耕望地一鎮圧、供試除草剤
・ベンチオカーブ・プロメトリン乳剤と微粒剤及びベン
チオカーブ乳剤、処理時期・は種翌日、処理量・乳剤60
・80 g/a : 微粒剤400・500 g/a、処理時の土壌水分・
軽土含水率28.8%で耕起砕土に支障ない程度、1区面積
及び区制・1区8 m²区制。

第1表 供試微粒剤の形状

剤別	粒 径	1 g中の粒数	粗 剤
A 型	32~48 ムッシュ 77%	約13,500	C 剤
B 型	19~14 " 67%	" 257	尿 素
C 型	32~48 " 64%	" 9,100	K 剤
D 型	65~250 " 90%	微粒剤F	—

試験結果と考察

過去におけるベンチオカーブ・プロメトリン乳剤は、
は種直後処理剤としての効果は CI-IPC や CAT に比較
してa 当り60~80 gで極めて高く麦類への影響も少なく
安定した結果が得られていたので本試験では CI-IPC や
CAT については省略した。

試験結果は第2表のとおりで、イネ科(スズメノテッ
ポウ)に対しては乳剤区が微粒剤区に比べて僅かに高い
が、全体の残草比が0~1.4%で両剤間に大差はないも
のと考えられる。また、微粒剤間ではC型区を除けば粒

径による効果の差異は目立つほどのことはなく、処理量
では500 a/g区が大であった。

第2表 除草効果と収量
(m²当り風乾重Δ除草区対比)

除草剤名	使用量 g/a	イネ科	広葉	その他	合計	精麦重 kg/a
B-3015・プロ メトリンA型 微粒	400	% 0.1	% 12.3	% 82.8	% 1.2	33.4
	500	0	5.7	0	0.2	35.4
同上 B型	400	1.4	22.1	34.5	2.4	38.4
	500	0.1	0.8	34.5	0.4	39.9
同上 C型	400	t 0	0.8	0	0.1	40.1
	500	0	0.4	3.4	0.2	39.6
同上 D型	400	0	5.7	31.0	0.5	37.3
	500	0	1.6	65.5	0.6	31.9
B-3015・プロ メトリン乳剤	60	0	2.5	18.3	0.2	34.6
	80	0	0.8	3.4	0.1	35.9
B-3015 乳剤	80	0.1	63.9	20.7	2.6	37.3
Δ 除草 (g/m ²)		64.24	2.44	0.58	67.26	32.3

広葉についてC型が高く処理量では500 g/a 区が大で
単剤に比べて各区とも大であった。

麦に対する薬害では問題としなければならないほどの
ことはなく、僅かに微粒剤区が初期生育が劣るようであ
ったが最高分けつ期の生育調査では差異は認められな
かった。また、微粒剤間の散布の難易は粒径が小さいほど
風による飛散が目立った。

以上の結果から、散布の省力化と効果からみて微粒剤
の適用性は高く、乳剤と同一成分量を使用すればほぼ効
果は同程度と考えられ(微粒剤は土塊間隙へ落下するた
めその部分からの発生が少ない)、今後土壌水分の多少
と効果について検討を要するが、水田裏作での利用価値
は高いものと考えられる。